

第2号 20円
昭和40年4月25日

内容

法人ニュース	2
私がセミナー・ハウスに期待すること	3
開館記念セミナー	4
募金ニュース	5
使用手続	8

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル3階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話 0426-④-4041-2

編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版



大学研究の急務

永井道雄

「大学セミナー・ハウス」の開

設もいよいよ間近にせまった。いろいろ意義のあるセミナーがここで開かれるにちがいないが、多様なセミナーのなかで、とくに力をいれてほしいことの1つは、大学自体についての研究セミナーである。

それには少なくとも二つの重要な理由がある。

(1) このセミナー・ハウスの開設までには、飯田宗一郎氏をはじめとする多数の人々の努力と多額の費用を要したが、それでも、これが収容する人員には限度がある。ほぼ二百名前後が限度だときいては、かりに二泊三日程度のセミナーを年間休みなしに開くとしても、これでは一年に三万人程度の人たちが利用できるにすぎない。ところがいまでは全国に約百万人の学生がおり、東京だけでもほぼその半分にあたる。それぞれの大学がマンモス化し、薄められた多人数教育を行なうという現状があらたまらなければ、少数の学生が、数日間、セミナーの経験をはたさずして、日本の大学の

勢は衰へはしない。

ところが他方、それぞれの大学には、マンモス化が進行するなかで、研究と教育を強化するために真剣に努力している人たちがあ

る。日本には、これまで、この人たちが経験にもとづいてつくりあげた見解を相互に交換し、検討する場がなかった。かりにセミナー・ハウスをこの種の目的のために生かすことができれば、集まった人の数は少なくても、セミナー・ハウスという場を通して、日本の大学がたがいに切磋琢磨することができ、ここでの検討を跳躍台にして、帰ってからそれぞれの大学の強化をはかることができる。

(2) 大学の研究は、いまでは一つの専門領域として深めなければならぬものである。大学の数も少なく、それぞれの大学の規模が小さかった昔は、経験が豊かで識見に富んだ個人の才能にたよって、大学の充実強化をはかることができたわけである。福沢、大隈、新島などの名がただちに頭にうかぶが、この事情は西洋でも同じであ

った。

ところが産業革命をへて、技術革新期に入ると、大学の規模にも内容にもいちじるしい変容がおこった。これも戦後の日本だけではなく、アメリカやソ連などでは早くからおこっていたことである。財政の規模も大きくなるし、大学の役割も複雑化した。長年、大学の経験をつんだ人でも、経験の範囲には限度があり、それを基礎にするだけでは全体を掌握することができない事態が生まれたのである。

こういう事情を背景にして大学研究を本格的な専門領域として確立したのはアメリカである。大学問題の専門家が少なくないし、多くの大学には「高等教育」という講義がある。大学行政も教育行政の重要な部門とみなされてお

り、法律と予算運営の知識をもつていれば、大学の事務はつとまるという日本流の考えはいまでは認められない。法律も財政もだじにはちがいないが、大学は官庁でも会社でもない。研究と教育というだじな目的があり、法律も財政もこの目的を生かす手段である。大学の行政者はこの関係を明確に把握していなければならぬし、他方、巨大化しつつある組織のなかで人間形成を行なう方法、専門が細分化されてゆくなかで総合を回復する方法について研究を重ねなければならないのである。日本でも最近では大学研究が次第

にさかんになりつつある。けれども専門の領域として大学で組織的な研究を行なっているところは少ない。国立大学の事務官は一般行政職から区別されておらず、教育行政者としての専門教育をうけてもいない。私立大学の事務もまたこれと同じように考えられているが、日本だけではなく世界的に大学を拡充しつつあるとき、その運営をあくまで教育のパブリック・アドミニストレーションもまた、根本的な変革をせまられている。

たしかに、大学問題を検討する場がこれまでも全くなかったとはいえないだろう。学術会議や文部省にも委員会があり、マス・コミもまたしばしばこの問題をとりあげてきた。けれどもはじめのべたようにそれぞれの大学での実践を基礎として研究的に大学再建の道をさがす共同の努力は乏しかった。最近の例だけでも慶応大学では授業料値上げ、山口大学では二教官に対する辞職勧告をめぐる事件がおこっている。これを全く対岸の火事とみることができ、ほど充実した日本の大学がはたしてあるのか。「大学セミナー・ハウス」の開設が、日本の大学の一歩前進のための一つのいしずえとなることを望むのは私だけではないと思う。

(東京工業大学教授)

理念と設計の調和

工事の中間に内披露

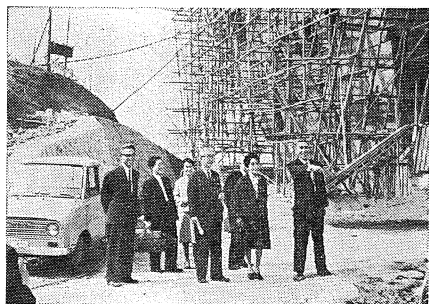
開館式は七月五日の予定

四月十七日の中間披露は翌日朝刊で各紙が報じた如く好天に恵まれ、出席者は三々五々連れ立って付近の丘陵に咲く山桜を遙かに眺めながら広い敷地内に配置された建物を順次参観した。ことに本館が四階まで完工したので、はじめ

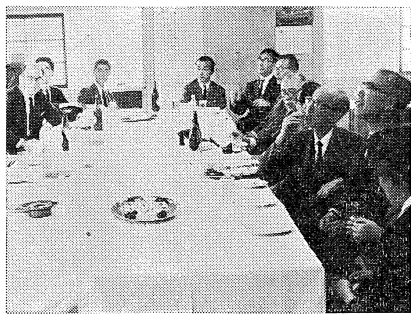
て見る本館の巧みな設計とその偉容に一同贊嘆の声を放っていた。また二十棟ほど建ったユニット宿舎では、すでにベッドの入ったところもあり(このベッドはオリソニック選手用のもの)、実感をもつて視察することができた。たまたま驚の声もきかれ、付近

の豊かな山容とその環境はすべての人々の満足をかったらしい。当日の主なる顔ぶれは佐藤三井銀行会長、茅前東大総長、上代前日本女子大学長、三輪教育大学長の常連のほか小出明大、野田成

蹊、藤田お茶の水、有賀日本女子大、金丸日大、若林明治学院の各学長、地元八王子市後藤教育長、芸術院会員清水多嘉喜氏、東大名誉教授山内恭彦氏など約四十名。設計者吉阪研究室と工事者清水建設は参観者から激励をうけ七月の完成を期して精励発奮の覚悟を新たにす好機会となった。



建築工事を視察する



内披露の概要

日記を繰って見ると一九六二年の十一月二十六日から、大学セミナー・ハウスの建物の設計に手をつけているから、それからもうかれこれ二年半近くなる。あと二、三ヶ月で一応の完成をみて、いよいよ大学セミナー・ハウスの活動が開始するわけだが、ここまでの設計および建設のために要した直接の労働量を拾って見たら、三月三十一日現在で、設計関係におよそ三、五〇〇人日、時間にして二万八、〇〇〇人時余、建設の方は一万六、〇〇〇人日、十二万七、〇〇〇人時と計算された。これから完成までになお設計の方で一万人時、建設の方で十万人時くらいを必要とするであろうと推定される。最近は工事もずいぶんと機械化されてはきているが、建設そのものにおよそ二万六、〇〇〇人が動員されたことになり、設計にはその六分の一ほどの人員が働いたことになるわけだ。

これで約五、〇〇〇平方

米の施設ができるのだから、一平方米に設計のために一人弱、職人が一平方米当り五人強働いたことになる。もっともこれは延べて平均した数字だが、設計について月に力を注いだ人員はかなり波を打っている。それを表わしたグラフを眺めていると、今日までの経過が思い出される。

話があってから設計を正式に契約するまでの最初の四ヶ月はだいたい一人くらいをほとんど置いて問題のときほくしと再構成ということが行なわれていた。内容を分析しては、それを形に翻訳して組み立て、地形にのせる型を探っている。ここで主として取り上げた点は、なるべく美しい多摩の丘陵を傷つけずに生かすこと、二百名の収容をどんなグループ分けにするか、大学セミナー・ハウスを象徴する形は何かといった点であった。

三月半ばに曲りなりにも正式契約がととのうと、それから毎日三、四名を動員して、それまでに醗酵していた考えを形に置きかえる作業が行なわれた。

大学セミナー・ハウスの設計者として

吉 阪 隆 生



それがおよそ一段落した頃に敷地の追加があって、これが確定するまでの待ち時間が出てくる。この新しい条件の発生で、全体の組立てをもう一度はじめから辿りなおしている。その結果は敷地中央の尾根を軸として南北に配していた施設を逆転させる結果となった。

七月末に現在の大地へ楔を打ち込んだ形にふみ切って八月初めに今日の大体の骨組みができて上った。施工担当の清水建設との打合せや都庁との連絡などあって若干の修正をもとに年末までは実施設計図の作製に忙殺されている。この間に農道のつけかえや宅地造成についての届出がなされているが、なかなか結論が出ないで困っている。

年あけて六四年、清水建設から見積りが提出されたが二年前に組まれた予算と合致しない所から三ヶ月ばかりがこの調整にとられて、図面をほとんど引きなおしている。

四月から建築の方の工事が本格的に始まるわけだが、円筒殻を用いて柱なしの構造である本館は、都の確認を得るのに建設省の建築研究所での審査まで廻ってやっとおけるといふ具合で、なめらかに進みはしなかった。しかし着工してからは毎日四、五名がかりきりで細かい部分の形の決定をすすめては毎週水曜日に現場と打ち合わせをしてきた。これから仕上げにかかればその頻度はもっと高まることだろう。

以上は大変物質的な量的な表現での経過である。そしてもしも物

私がセミナー・ハウスに期待すること

林 竹二

一

日本の大学は、ひどい混乱のうちにある。永井道雄氏はこれを「繁栄のなかの危機」と表現した(中公新書『日本の大学』)。戦後、急激に大学と大学生の数が増加するにつれて、大学の「実」が失われた。だが、大学の膨張は社会の近代化に伴う必然の結果なのだから、その膨張が不可避免的に大学の実質を失わせるとすれば、「大学」という存在そのものがすでに過去のものとなったといわれなければならぬ。これは果して避けがたい結論だろうか。永井氏は『日本の大学』(九頁参照)この混乱は「意識的に把握し計画的に再建を考えれば」それから抜け出す活路はあると考える。もちろん、私もそれを信ずる。しかし、大学の現状はその当面する危機を十分な深みにおいて捉えていず、したがって、主体的、計画的にそれに対処する意志と能力を失っているように見える。そこに現在の日本の大学の危機の深刻さがある。

二

私が大学セミナー・ハウスの設立を高く評価するのは、それが大学教育の危機に直面した大学人が「その責任において」これにたいして行動しようとする意欲のあらわれであるからである。セミナー・ハウスの趣意書によれば、大学規模の拡大によって教授と学生の個人的な接触がはなはだしく困難になった。これは大学が人格形成の場としての役割を演ずる上で重大な欠陥をなしている。この欠陥を補うためにセミナー・ハウスはつくられた。だから指導教授を中心とする学生の小集団にたいし、研究と修練と交際の場を提供することが、この施設の第一の目的であるという。これは現在の大学教育の欠陥にかんがみてまことに適切な狙いであると考えるが、これに関連して一、二の希望をのべておきたい。

その一つは、ここでもたれる集いが真の意味の「話し合い」の場であってほしいということ。私はかつて、『大学と人間』(大学セミナー・ハウス編、昭和三十七年九月)によせた「アカデミーの精

神」という短文中でもふれたように、ソクラテス以来の伝統によれば、教育という仕事の核心は、知識の授受にあるのではなくて、無根拠にわれわれのうちに形づくられ、根を下し、われわれの生活や行動を規定しているドクサ(意見ないし己見。主観的な独断やイデオロギーのみならず、世間の通念もこれに入る)から人間を解放することにあり。この解放の手段が、ソクラテスにおいては「問答」(ディアロゴス)であった。そこでは合意を通して、導き出される結論は、自分自身で取り出した結論として、引き受けられる。それによってドクサから自由になる道が開けるのだが、それは問答が友好的におこなわれてはじめて可能であり、またそれは、やがて真理を何ものよりも尊重し、また真理のために真理を追い求める精神につながる。

問答を通して人間がドクサから解放される過程は、実はドクサに囚われている自己とのラジカルな対決なしにはなしとげられない。この作業は、事実においては、おそらくは話し合う双方の側にある。このたたかひを要求するであろう。「話し合い」がこの深みにまでとどいたとき、それはまさしく人間が人間に出合う機縁となりうるであろう。

三

さらに私は、セミナー・ハウス

が単に学生と教授とが共に起居し、共に学ぶことを通じて人間的に触れあう機会を提供するだけでなく、大学教育の危機にたいして憂いを共にし、かつ自分に出来るかぎりでの行動をもってそれに立ち向かう意志をもつ人々の多様な願いや計画が、そこに持ちよられ、次第に結び合わされる日のあることを期待したい。現在日本の大学をとりえている危機は根本的には、真理のために真理を追い求め、それを何よりも尊重するという大学の魂——あるいは大学の中で生きる人間としての初心が忘れられていることよって、決定的なものとなっている。それが失われるとき、大学は、もはや「危険な制度」としての自負をもって、危険であることよって社会に参与する(『日本の大学』、一一二頁参照)資格を失い、大学自治の要求は、徒らに大学教授の、正当な根拠をもたない特権の擁護以上のものではなくるのである。現在の大学教育の危機を感じることも、もっとも深い人士の協力によつてここまで推しすすめられてきたセミナー・ハウスの将来の活動が、それぞれの大学における大学再建の努力を促したり、力づけたりする結果を生むであろうことは、十分期待できることではなからうか。

(東北大学教授)

(二頁より)

量的なだけで採算を計算するならば誠に倒産会社の経営といわねばなるまい。幸か不幸か私たちはそろばんに入らない世界でのフランスにもっと重点を置く習性がついていて、時々資本家、事業家などから苦い汁をなめさせられるのだが、やはり止められない。それはこうした採算無視といえる努力の結果、そのできた施設に入られる方々がほんとに喜んで下さる顔を見たり、あるいは一般の人々も含めてこの施設に接することでも感動して貰えたり、といった無私の喜び、また一方に思う通りにうまくできた時の自己満足、生み出したものへの愛情といったものが、苦勞を打ち消してくれるからである。こうしたものは数字で表現のしようがない。

そうした面からグラフを描くなら、むしろ前記の労働人時とちよと逆に近いものになるのではなからうか。ピークはとっかかりの課題の把握のための努力、次に本館の形姿を探し求めていたあたりにおいてそうである。今の努力は最終的に前記のような数字に示せない報酬が得られるかどうかに向かつて行なわれている。下世話な世界は一応別に解決するとして。

(早稲田大学教授)

* * *

●開館記念セミナー

「世界の中の日本」を主題として
新しい人間形成の道を拓く

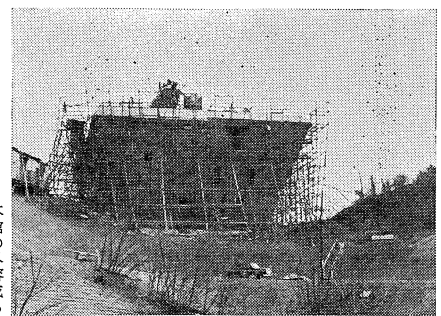
運営委員長に永井道雄氏を予定

これからの日本および日本人はどうあるべきかを、日本の伝統と特殊性をふまえながら世界的な規模で思考しようというのが、この開館記念セミナーの目的である。われわれが生きている今日の時代は、近代化といわれる変化の時代であり、科学技術革新の時代である。世界の中で、民族の自立性と国際間の連帯性を高めることが今後の課題でなければならない。

運営委員長には近著『日本の大衆』で知られるように大学と学生を愛して巴むことのない教育学者永井道雄東京工大教授が就任を内諾されていらっしゃるので、ご自分も一つの分団を指導されるであろう。開館にふさわしいセミナーを開き、セミナー・ハウスの歴史的門出を飾りたい。

仙台から

私は、この三月下旬、建設中の大学セミナー・ハウスを訪れる機会にめぐまれた。多摩丘陵に影しい数のユニット宿舎が群れて建つ眺めは、ひどくメルヘンじみた印象を与えた。私は上京のさいはでできるだけ時間をさしきって、ここに泊めて貰おうかと考えた。新緑の頃のこの丘はどんなに美しいか。朝はさだめし小鳥の囀りがにぎやかなことだろう(そういえば小舎はいくらか小鳥の宿の趣きがあった)。私はここでたまたま開かれていたセミナーに、とび入り許してもらえらるだろう。ちがっ



本館の外容成る

▼学生について考える▲

『日本』四月号より抜萃

増田 四郎

残念ながらいまのところ、とてもその自信はないが、それをなしとげるためには、まずもって、日常生活のあいだに学生と接触し、学生のなまの声を聞き、学生の中にとび込んでいって、このどろまみれの社会思潮の波しぶきの中でいっしょに社会のこと、文化のこと、生活のこと、人生のことを考え、しくみをつくるよりほか方法がない。マス・プロ教育になればなるほど、逆にそうした施設の配慮が必要不可欠なのである。文教政策にはこのことを真剣に考えなければならぬ。

最近、都下八王子市の郊外に、大学セミナー・ハウスというまったく新しい構想の施設が建設されており、都下の諸大学をはじめ、広くこれを全国の大学生に開放して、学生相互、学生と教師、学生と社会人の人的接触の道場としてしようとしているが、そのねらいもまったくこの点にある。マンネリズムにおちいったり、変な国家統制や思想統制におちいることなく、真にこの精神がいかされるように運営されるならば、その効果は必ずや絶大なものがある。

(一橋大学学長)

セミナー・ハウス
開館記念セミナー

主題「世界の中の日本」

期日 七月六・七・八日

参加資格 国公立立大学協力会
員校の学生、大学院生

告知人員 約一〇〇名(男女各学科)

予費用 一人当り二、五〇〇円(宿泊費その他。聴講料無料)

募集方法 会員校に案内を出し
ますから大学を通して参加申込みをすること。

運営委員長 東京工業大学教授
永井道雄氏

プログラムの概要
総合講義の担当者

第一日(6日)火 登録・午後一時～二時/歓迎茶会・午後二時/開講式/挨拶・館長 茅誠司氏/全体講義/懇談/自由時間

第二日(7日)水 全体講義/分団討議/自由時間

第三日(8日)木 研究報告/ゲスト講演・一橋大学名誉教授中山伊知郎氏/送別午餐会/散会・午後二時

その他、各科若手教授 山内恭彦氏

貝塚茂樹氏 (人文)京大大学教授

東畑精一氏 (社会)東京大学名誉教授

(自然)東京大学名誉教授

新入生を迎える講演会

日時 5月15日(土)午後2時

場所 明治大学和泉校舎

挨拶 理事 早稲田大学 長 大浜信泉氏

講演 「大学の使命・学生の使命」
東京大学教授 松田智雄氏

「研究の楽しさ」

賛助出演 東京大学名誉教授 坂口謹一郎氏

明治大学ハーモニカ・ソサイティー

募金ニュース

三億円募金六分の五に達す

— 今や胸つき八丁 —

残り五千万円が難コース

個人寄付に期待して最後の努力

▼法人寄付▲

昭和四十年七月三十一日をもって寄付金免稅取扱期間が終るので、是が非でも本年は三億円募金を達成しなければならぬ。しかも昭和四十年一月末をもってしても、残り一億円を集めなければならなかった。このための対策をたてるため、主腦陣の覚悟を促がし、募金体制を確立する必要から、昭和四十年二月三日、パレスホテルに佐藤三井銀行会長、大浜早稲田大学総長、増田一橋大学長、茅前東大総長および飯田専務理事が会合し、協議した。

その結果は別記の「募金日記抄」が示すように集中的に募金運動を展開した。わずかに二月、三月の二ヵ月で五千万円を集めるという大成果を挙げる事ができた。第二回目のお願いに参上するところもあって、苦心のほどにご同情を下さった社長さんもあるくらいである。

胸つき八丁は骨が折れますといふのが総長・学長の述懐である。いよいよ残り五千万円に漕ぎつけたとはいえ一息入れる暇もない。この苦勞のうえにセミナー・ハウスの殿堂は築かれるわけである。

▼個人寄付▲

一千万円目標に

全大学人の協力を仰ぐ

各層の支援をうけて個人寄付が意想外に進展していることは感謝すべきことである。本法人にとっては、寄付金の額もさることながら、多くの方々々に大学問題の関心を深めていただき、共に日本の教育について責任を分かち合うという精神的協力こそ無限の財産なのである。

これまでご寄付下さった方々には、三笠宮さまをはじめ、大学総長、教授、大学生、高校生そして農業、漁業、林業、さらに銀行頭取、新聞社社長から医師、弁護士、芸能家、評論家に至るまで、あらゆる階層の方々が含まれている。この広汎な国民的支持によって明らかのように、セミナー・ハウスが財界の寄付を仰ぐことによつて、産学共同の事業のごとく判断したり、国庫補助金をうけることによつて、政府や政党の支配をうけるがごとく受けとるならば、それは甚しい誤解といふべきである。

一枚、または一通の寄付申込書や払込通知書にも深い尊敬を捧げ

ながら受け取るのである。信頼を積み重ねながら強固な財団に成長させたいと祈っている。

三億円募金申込状況

(昭和四十年四月二十日現在)

申込総額

二五二、四一〇、〇〇〇円

A 法人寄付

申込総額

二五〇、七八四、〇〇〇円

申込会社数

三五七社

B 個人寄付

申込総額

一、六二六、〇〇〇円

申込人数

二九八名

内訳

一、〇〇〇万円以上 二社

五〇〇万円以上 七社

三〇〇万円以上 一社

二〇〇万円以上 一三社

一〇〇万円以上 四一社

五〇万円以上 四四社

三〇万円以上 六五社

一〇万円以上 七五社

一万円以上 九九社

個人寄付依頼状

謹啓 国公立大学共同の教育施設としては、わが国最初の試みである大学セミナー・ハウスの構想は各方面の支持をうけ、計画も進捗し、財界の寄付と国庫補助金によって建設することとなり、昭和三十九年四月工事に着手いたしましたところ、いよいよ昭和四十年七月開館の運びに至りました。

三億円募金を達成するために、昭和四十年三月末において、なお五千万円を不足しております。経済界も不況の折から相当の困難を感じますので、この際法人寄付と並行し、一千万円を目標に個人寄付を仰ぐことにな

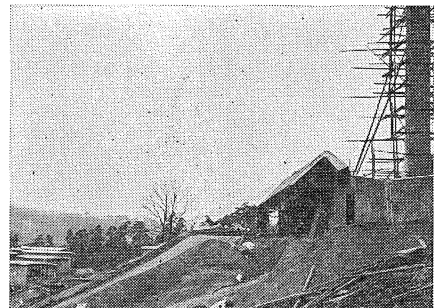
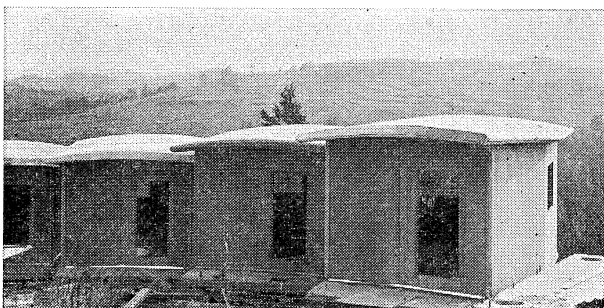
募金要項

個人のご寄付は、一口の単位を一、〇〇〇円としますが、口数の制限はありません。なるべく三口以上お願いします。

送金方法

振替口座 東京七四五九〇番
取扱銀行 都市銀行十三行本支店
信託銀行六行本支店

お申出で下されば払込用紙をお送りします。



敷地および付近の多摩丘陵を背景にしたえんとつのあるサービス・センター(右)とユニット・ハウスの一ブロック

個人寄付申込者 (第二回報告)

(昭和40年2月—4月, 申込順)

申込額内訳	80,000円	1名	2,000円	42名
	20,000円	2名	1,000円	39名
	10,000円	14名		
	5,000円	32名		
	3,000円	54名		
合計	705,000円		184名	
累計	1,626,000円		298名	

三笠宮崇仁殿下	前総理大臣	篠田 礼殿	岩手医科大学学長	白山 源三郎殿	関東学院大学学長
池田 勇人殿	日本育英会会長	志村 豊殿	丸栄副社長(東京)	上谷 琢之殿	東洋アルミニウム業務部長
森戸 辰男殿	前東京都立大学学長	河部 清枝殿	東海木工社長(東京)	根本 義殿	東洋アルミニウム常務取締役
永井 雄三郎殿	早稲田大学名誉教授	鞍馬 菊枝殿	都立三田高等学校教諭	樋口 佐兵衛殿	京三製作所社長(東京)
島田 孝一殿	武蔵工業大学学長	高松 忠清殿	住吉大社宮司	平田 重雄殿	建築家
山田 良之助殿	電気通信大学学長	中村 直二殿	大阪齒科大学教授	佐々木 道雄殿	東京大学名誉教授
松平 正寿殿	立教大学名誉教授	北村 兵四郎殿	大阪アルミニウム製作所社長	和田 文吾殿	東京大学名誉教授
佐々木 順三殿	国立ガンセンター総長	川口 芳太郎殿	北長商店常務(岐阜)	宇野 哲人殿	東京大学名誉教授
比企 能達殿	三井銀行本町支店次長	籠島 誠治殿	学校図書社長	大山 松次郎殿	東京大学名誉教授
池田 有殿	三井銀行本町支店次長	千住 鎮雄殿	埼玉化学工業会長(埼玉)	緒方 富雄殿	東京大学名誉教授
福田 重治殿	三井銀行本町支店次長	安藤 瑞夫殿	慶応義塾大学教授	緒方 知三郎殿	東京大学名誉教授
前田 喜平殿	三井銀行業務第二部長	加藤 五六殿	立教大学教授	兼重 寛九郎殿	東京大学名誉教授
木島 康彦殿	資生堂取締役	湯浅 八郎殿	明治大学常勤理事	福田 武雄殿	東京大学名誉教授
小山 常正殿	日高株式会社相談役(神戸)	川口 文志郎殿	国際基督教大学理事長	近藤 康男殿	東京大学名誉教授
高畑 誠一殿	クロダイト工業社長(名古屋)	岡本 春三殿	市金工業社長(京都)	木内 政蔵殿	東京大学名誉教授
黒田 文一殿	相模工業社長	富山 富一殿	京都外国語大学教授	南 原 繁殿	東京大学名誉教授
竹内 強一郎殿	大阪市立大学教授	児玉 桂三殿	中央ビルディング社長	佐々木 香殿	東京大学名誉教授
中 脩三殿	日立製作所横浜工場長	加賀美 東一殿	日吉回漕店社長(横浜)	柴田 雄次殿	日本学士院院長
小林 季八殿	国際基督教大学教授	原 島 進殿	慶応義塾大学学長	平塚 六郎殿	東京大学名誉教授
菊池 武美殿	武蔵野銀行頭取	小谷 正雄殿	慶応義塾大学教授	釜薙 善一殿	多摩電気工業代表取締役
原 島 鮮殿	伊予鉄道常務取締役	松田 智雄殿	東京大学教授	松沢 武雄殿	東京家政学院大学教授
熊田 克郎殿	小松ストアー副社長	村井 資長殿	早稲田大学教授	荘 寛殿	莊病院院長
小泉 順次郎殿	福岡大学教授	白井 常殿	東京女子大学教授	田 宮 博殿	徳川生物学研究所所長
塚本 勉夫殿	蓬萊殖産社長(東京)	西村 秀夫殿	立教大学助教授	堀 豁殿	東日本興業会会長(仙台)
児玉 幸蔵殿	音楽家	秦 二郎殿	立教大学総務部長	林 竹 二殿	東北大学教授
小島 正雄殿	結核予防協会大分県支部長	川久保 孝雄殿	慶応義塾監局長	三浦 岱 栄殿	慶応義塾大学教授
高安 慎一殿	清水精工所役員(埼玉)	小島 貞彦殿	青山学院総理事	墨 末 芳殿	艶金染工社長(岐阜)
清水 啓三郎殿	帝塚山学院短大学長	浜田 健三殿	早稲田大学庶務部長	樋本 英夫殿	高槻商工福祉事業協同組合理事
蒲田 政治殿	中部日本放送副社長	山本 芳夫殿	日本私立大学連盟事務局長	中 林 裕一殿	弁護士(青森)
小島 源作殿	日商社長(大阪)	石田 昭男殿	日本私立大学連盟事務局長補佐	数原 洋二殿	三菱鉛筆社長
西川 政一殿	埼玉トヨタ自動車社長	細入 藤太郎殿	立教大学教授	墨 金次郎殿	艶金化学繊維社長
嶋田 光衛殿	阪田商会会長(大阪)	早川 豊水殿	慶応義塾大学経理部長	福田 邦三殿	山梨大学学長
阪田 靖人殿	エフシー製作所顧問(兵庫)	小林 義一殿	東京女子大学事務長	増永 茂巳殿	増永組会長(熊本)
茶谷 薫重殿	兼松社長(大阪)	肥田 野直殿	北海道水産製造社長	福井 淳蔵殿	福井善四郎本店社長
沖 豊治殿	島田製作所社長(仙台)	高野 源蔵殿	弁護士(大阪)	本田 栄一殿	日本製紙印刷工業社長
島田 利平殿		菅生 謙三殿		藤岡 清俊殿	日本発条副社長

募金ニュース

左右田 徳郎殿	東京大学名誉教授	伴 琢 磨殿	日本女子大学学務部長
沖中 重雄殿	東京大学名誉教授	一番ヶ瀬康子殿	日本女子大学助教
平田 森三殿	東京大学助教	中山 喜美子殿	日本女子大学職員
小堀 巖殿	東京大学助教	岡原 静殿	日本女子大学職員
江上 不二夫殿	東京大学教授	中島 武雄殿	日本女子大学文学部長
高橋 秀俊殿	東京大学教授	栗原 嘉名芽殿	日本女子大学教授
五唐 勝殿	東京都立大学助教	道 喜美代殿	日本女子大学教授
福原 満州雄殿	京都大学教授	清水 康雄殿	清水建設社長
坪井 誠太郎殿	東京大学名誉教授	清水 正雄殿	清水建設副社長
向坊 隆殿	東京大学教授	吉川 清一殿	清水建設副社長
森 繁 雄殿	東京大学教授	小笹 徳蔵殿	清水建設相談役
小倉 安之殿	東京大学教授	小栗 賛吾殿	清水建設専務
尾崎 盛光殿	東京大学文学部事務長	城戸 七太郎殿	清水建設専務
谷口 修殿	東京工業大学教授	三好 悦治殿	清水建設専務
堀米 庸三殿	東京大学教授	末松 栄殿	清水建設専務
小林 正殿	東京大学教授	鈴木 一幸殿	清水建設専務
朽津 耕三殿	東京大学助教	野地 紀一殿	清水建設専務
杉江 清殿	文部省大学学術局長	坂野 常隆殿	清水建設専務
五味 智英殿	東京大学教授	野口 愛次郎殿	清水建設専務
飯田 一郎殿	農業(茨城)	坂本 義殿	清水建設専務
野本 富一殿	大阪熱処理社長	衣川 正俊殿	清水建設専務
京極 純一殿	東京大学教授	玉真 秀雄殿	清水建設専務
海野 知三郎殿	東京大学教授	中山 源治殿	清水建設専務
小山 弘志殿	東京大学助教	久長知丑二郎殿	清水建設常任監査役
久保 正幡殿	東京大学助教	仁瓶 久男殿	清水建設常任監査役
飯田 修一殿	東京大学助教	岡本 港殿	清水建設取締役
兵藤 申一殿	東京大学助教	関 勇殿	清水建設取締役
小野 健一殿	東京大学助教	清水 夏雄殿	清水建設取締役
木内 信蔵殿	東京大学教授	竹下 賢一殿	清水建設取締役
赤松 秀雄殿	東京大学教授	迫田 国孝殿	清水建設取締役
弥永 昌吉殿	東京大学教授	額 纈 忠 役殿	清水建設取締役
西川 治殿	東京大学助教	橋本 文夫殿	清水建設取締役
氏家 寿子殿	日本女子大学教授	板倉 珪殿	清水建設取締役
月田 カン殿	日本女子大学評議員(前学監)	大築 志夫殿	清水建設取締役
中原 賢次殿	日本女子大学庶務部長	白井 周二殿	清水建設取締役
野島 幹男殿	日本女子大学経理部長	宮田 益雄殿	清水建設取締役
安東 幸子殿	日本女子大学園生活部長	竹内 喜夫殿	三青社社長(東京)

※募金日記抄※

(昭和四十年)

▽一月一九日 早稲田大学に大浜総長を訪ね募金運動の相談。

▽一月二一日 三井銀行に佐藤会長を訪ね募金運動の相談。

▽二月三日 佐藤三井銀行会長、大浜早大総長、増田一橋大学長、茅館長、飯田専務理事がパレスホテルに会合し、残り一億円の達成方法、募金体制の調整を協議。

▽二月九日 大浜早大総長、茅館長に随行し各社訪問。

▽二月二四日 大浜早大総長、茅館長に随行し各社訪問。

▽二月二六日 前半は大浜早大総長、後半は増田一橋大学長が茅館長に同行し各社訪問。

▽三月一日 三井銀行に佐藤会長を訪ね、募金対策の指示を仰ぐ。

▽三月四日 大浜早大総長、茅館長に随行し各社訪問。

▽三月五日 増田一橋大学長、茅館長に随行し各社訪問。

▽三月一〇日 東京大学に大河内総長を訪ね、募金状況を報告。

▽三月一五日 三井銀行に佐藤会長を訪ね、募金について報告。

▽三月一六日 増田一橋大学長にご奉仕を願ひ、終日、各社訪問。

▽三月一七日 増田一橋大学長に随行し各社を訪問。

▽三月二二日 準備を整え、名古屋に出張し募金のため各社訪問。

三月二六日 大河内東大総長に随行し各社を訪問、募金について懇請する。

▽四月一〇日 三井銀行に佐藤会長を訪ね、募金の進捗状況を報告。いよいよ残り五千万円になったので今後の対策を協議し、セミナー・ハウスの設備、ことに毛布、食器などの什器備品の現物寄付の方法などについて懇談する。

専務理事 飯田宗一郎

※庭と花木の寄贈※

八王子市から庭を——

昨十月二十八日、大浜理事長が八王子市役所に植竹市長を訪ね、本法人と市との交友的關係を要望されたおり、本法人の懇請をいれた同市長は、セミナー・ハウスを同市に歓迎する意味での庭園の寄贈を内諾された。その後、市および商工会議所等の関係団体がこの計画に参加されることとなり、開館式までには美しい庭園が造成されることとなった。

日本花の会から花木を——

同十月二十三日には、茅誠司先生が募金のため小松製作所に河合良成会長を訪ねられた。花の好きな二人の間に花の話が出て、日本花の会の会長である河合氏からセミナー・ハウスの敷地内を美化するため苗木三〇〇本を寄付して下さるという申出に接した。やがて梅、桃、桜の花が学生達の眼を楽しませることであらう。



セミナー・ハウス 使用の手続き

第一 使用者の資格

① 指導教授を中心とする学生の小集団(ゼミナールなど)が、学問および修練上の交わりを主とする生活を行なうことを目的とするので、原則として教授のいない学生だけの集会には使用しない。

② 施設の利用

③ 相当多数の収容力のある宿泊を兼ねた教育施設—学生を主体にした—であることを主眼としているが、日帰りの研修などに利用されてもよい。

④ 本法人の役員、評議員、企画委員などから紹介された教育、学術、文化関係団体および大学ゼミナール・ハウス建設資金を寄付された法人や個人が研究、修練の目的をもって利用される場合はその便宜を提供する。

⑤ 本館のゲスト・ルームは国内、国外の学者、教育家および本法人の後援者などの長期、もしくは短時日の滞在に、その便宜を提供する。

⑥ ユニット・ハウス入退舎時間については、一泊の規準は当日午後二時から翌日の午前十時までとなっているから、セミナーの最終日には必ず午前十時に室をあける。退舎後は、携帯品をサービスマスターに一時預けし、セミナーに出席するとか、本館ラウンジで自由に談話するとか、夕食をとって帰るとよい。

第二 施設の概要

〔A 本館〕

事務室、企画室、理事室、応接室、自由懇話室(ラウンジ)、ロビー、食堂(二〇〇人収容・講堂も兼ねる)、ゲスト・ルーム(洋式ホステル) セット二室、個室二室、図書室、売店、機械室、倉庫

〔B 宿舎村〕

① セミナー室—
中央セミナー館
(一棟・五十〜七十人)
中セミナー室二棟
(一棟・二十人)
小セミナー室五棟
(一棟・十五人)

② 宿舎(洋式)—
ユニット・ハウス(百棟)
収容人員二百人(一棟二ベッド)

③ サービスマスター—
浴室(大小二室)、寝具室、ボイラー室

※ セミナー村は七ブロックに分かれ、一ブロック毎にセミナー室

を中心にユニット・ハウスが建てられていて、適宜男女別にブロックを分けることができる。サービスマスターは村での生活が楽しく営まれるような機能を發揮する本拠である。

第三 申込方法

① 所定の申込用紙にご記入の上、使用希望日の三週間前、大学セミナー・ハウス宛お送り下さい。

② 電話でお申し込みの場合は、使用期日および宿舎、セミナー室を予約され、申込用紙をお送りしますから折返し正式にお申し込み下さい。

③ グループで申し込まれる場合は、申込書に予約金として使用料の二〇%を添えて下さい。予約取消の場合も予約金はお返しできませんからご承知お願います。

第四 利用料金

① 宿舎(一泊三食つき)
学生 八五〇円
教師・社会人 一、〇〇〇円

② セミナー室(一日につき)
会員校の主催するもの無料
全施設 一〇、〇〇〇円
中央セミナー館 三、五〇〇円
中セミナー室 一、五〇〇円
小セミナー室 一、〇〇〇円

③ ゲスト・ルーム(バス・トイレつき、本館三階)
洋室セット 一泊一、三〇〇円
洋室個室 一泊一、〇〇〇円

(7月1日発行予定)

「大学と人間」 叢書第三巻 先人に学ぶ …人と業績…

- * 西田幾多郎先生の生涯と思想 高坂正顕
- * 小野塚喜平次先生の人と業績 蠟山政道
- * 坪内逍遙先生の人と芸術 本間久雄
- * 本多光太郎先生の人と業績 茅誠司

協力会員校

東京大学	電気通信大学
一橋大学	お茶の水女子大学
東京教育大学	東京都立大学
東京工業大学	早稲田大学
東京学芸大学	日本女子大学
東京医科歯科大学	慶応義塾大学
東京農工大学	明治大学
	中央大学
	青山学院大学
	法政大学
	立教大学
	日本大学
	東京女子大学
	武蔵工業大学
	明治学院大学
	成蹊大学
	津田塾大学
	順天堂大学

編集後記

本号をもって、いよいよセミナー・ハウスが使用できるということを公表させていただけることは、なんと嬉しいことであろう。

七月五日に歴史的な開館式を行ない、直ちに翌日から開館記念セミナーを各分野の代表的学者によって開講し、国公立の大学生と共に本格的セミナーの第一歩を踏み出すことになる。

初年度は難しいことはぬきにして、ご利用いただくつもりであるが、過去三カ年、会費をもつてこの法人の維持運営を支援して下さった国公立二十五大

学には是非とも多くの機会を提供したいと思っている。早くも新聞紙上で開設の近いことを知られた方々から使用の申込みが続いているが、準備全く不行届きであることを心配しながらも心から皆さまを歓迎しようと体制をととのえている。ゲスト・ルームは上京なさる先生方のお宿にもなりましょうし、都内の先生方は、ご家族で夕食において下さるのもよいでしょう。

本号においても永井、林両先生に鞭撻され、大きな期待をいただきましたが、これを大切にしたい。(S・I生)